

2歳児が友達と一緒に活動する楽しさを味わうために

－「子どもをつなぐ」保育者の援助と配慮を中心に－

林 富 公 子

キーワード：2歳児、友だち、保育者の援助・配慮、エピソード記録

I. 問題と目的

①小規模保育所の増加

「子ども・子育て支援新制度」の施行、0～2歳児を中心とした保育所利用児童数の増加、子育て世帯における子育ての負担や孤立感の高まり、児童虐待相談件数の増加等保育をめぐる近年の状況を鑑みて、保育所保育指針が10年ぶりに改定されることになった。

保育所等の利用率は平成20年では30.7%(1,2歳児の利用率27.6%)であったが、平成27年では37.9%(1,2歳児の利用率38.1%)と年々増加している。中でも、1,2歳児の保育所などの利用率は27.6%から38.1%と非常に増加している²⁾。この最も大きな理由は、厚生労働省の「保育所等関連状況取りまとめ」からも分かるように、特定地域型保育事業の急進である³⁾。

特定地域型保育事業とは、平成27年4月1日より施行された「子ども・子育て支援新制度」の待機児童対策の一環としてなされた小規模保育、家庭的保育事業、居宅訪問型保育事業、事業所内保育事業のことで公的給付の対象となっている保育施設のことである。この中でも小規模保育所の数は平成27年から平成28年の1年間で約1.5倍となっておりその増加は目覚ましい⁴⁾。

特に小規模保育事業A型⁵⁾は平成27年から平成28年の間に1.8倍と激増しており、1、2歳児の保育の増加には小規模保育事業A型が大きく貢献していると言える。

一方、小規模保育事業は「3歳の壁」⁶⁾の問題が話題になっている⁷⁾。この「3歳の壁」の解決策として、3歳児以降の保育の場が見つからないから小規模保育施設で3歳児以上を受け入れればよい⁸⁾という意見もある。しかし、そのような単純な事柄でこの問題は片付かない。

というのも、保育所保育指針では3歳児以上と3歳未満児では指導計画の作成⁹⁾や保育内容¹⁰⁾において違いがある。このため単に3歳未満児と同じような状況で受け入れればよいと言うわけではないからである。

また、現在の状況では小規模の3歳児が認可の保育所や幼稚園の3歳児と同程度の人数が在籍することはないこと¹¹⁾もあり、3歳未満児に対してごく少数の3歳児以上が在籍することが予想される。3歳児を小規模で預かる場合、小規模施設のキャパシティーでは、認可の保育所や幼稚園と同じような設置基準で保育室の広さを確保することは難しい。つまり、その場しのぎとして単に3歳児が3歳未満児と一緒に小規模に在籍しているだけでは子どもにとっての最

善の利益を考慮しているとは言えない。

このようなことから、小規模保育では適正かつ確実な保育の実施及び3歳以上での保育の継続的な提供のため、「保育内容の支援」、「代替保育の提供」、「卒園後の受皿」の3要件を満たす連携施設（認可保育所等）を確保することが小規模保育施設等には義務付けられている¹²⁾。保育内容においても保育所保育指針（平成29年3月告示）の中でも小規模保育を含む地域型保育事業において、それぞれの特性に留意しながら保育所保育指針の内容に準じて保育が行われるべきことが明記されている。特に3歳未満児の保育に関しては、その内容や計画作成上の配慮事項を丁寧に示すことで、その保育現場での具体的な保育実践の向上に繋がっていくことの重要性が述べられている¹³⁾。つまり、小規模保育所の2歳児にとって保育所保育指針の保育内容を鑑みながら保育を行うことは必然の事として考えられる。

ここまで見てきたように、小規模保育はまだ制度として考えなくてはならない問題を内包していることは事実である。しかし、小規模保育、認可保育所を問わずいずれの施設にあっても子どもたちにとって最もふさわしい生活の場を作り出していくことが保育に携わるものにとって大切な事柄である。

このようなことから、今回は次の事柄に注目する。

第一に、小規模保育の2歳児は3歳児以上になると認可保育所などに移動することが前提となっている。しかし、同一施設での移動ではないので同一施設以上に保育所保育指針に則った保育内容を吟味していかななくてはならないこと。

第二に、3歳未満児では保育内容においても保育者との関係が前面に押し出されているが、3歳児以上では仲間や友達との関係が重視されていること。

この2点から、小規模保育における3歳未満児から3歳児以上の保育内容への接続を考える必要がある。この為に、2歳児が保育者との1対1の関係をベースにして友達関係を構築していく為の保育者の援助について考察する。

②保育所保育指針（平成29年3月告示）における1歳以上3歳未満児の保育内容

次に、小規模保育における保育内容を考える上でも重要である平成29年3月に新しく保育所保育指針が告示されたことを踏まえ、「保育所保育指針（平成29年3月告示）1歳以上3歳未満児」の保育内容基本的事項について見る。

1歳以上3歳未満児の保育に関わるねらい及び内容

(1) 基本的事項

アこの時期においては、歩き始めから、歩く、走る、跳ぶなどへと、基本的な運動機能が次第に発達し、排泄の自立のための身体的機能も整うようになる。つまむ、めくるなどの指先の機能も発達し、食事、衣類の着脱なども、保育士等の援助の下で自分で行うようになる。発声も明瞭になり、語彙も増加し、自分の意思や欲求を言葉で表出できるようになる。このように自分でできることが増えてくる時期であることから、保育士等は、子どもの生活の安定

林：2歳児が友達と一緒に活動する楽しさを味わうために

を図りながら、自分でしようとする気持ちを尊重し、温かく見守るとともに、愛情豊かに、応答的に関わる必要がある。

イ本項においては、この時期の発達の特徴を踏まえ、保育の「ねらい」及び「内容」について、心身の健康に関する領域「健康」、人との関わりに関する領域「人間関係」、身近な環境との関わりに関する領域「環境」、言葉の獲得に関する領域「言葉」及び感性と表現に関する領域「表現」としてまとめ、示している。

ウ本項の各領域において示す保育の内容は、第1章の2に示された養護における「生命の保持」及び「情緒の安定」に関わる保育の内容と、一体となって展開されるものであることに留意が必要である¹⁴⁾。

(下線筆者)

ここでは、子どもの心身の発達に伴いそれを支える保育士の姿と、保育内容の取扱いについて述べられている。まずここで「保育士等は、子どもの生活の安定を図りながら、自分でしようとする気持ちを尊重し、温かく見守るとともに、愛情豊かに、応答的に関わる必要がある」と記されていることは、ウでも述べられているように養護にかかわる「ねらい」および「内容」の「生命の保持」及び「情緒の安定」と深く結びついている¹⁵⁾。

また保育内容5領域についても書かれているが、この保育内容の5領域は小学校以上の教科のように保育者が子どもに教授するものではなく、保育を行う際に子どもの育ちをとらえる視点として示されたものである¹⁶⁾。つまり、1歳以上3歳未満児の保育において、5領域の保育内容は「養護」と結びつけて総合的に保育することが重要であると言える。

さらに1歳以上3歳未満児において「養護」と5領域を総合的に保育することの根幹は、ここで「子どもの生活の安定を図りながら、自分でしようとする気持ちを尊重し、温かく見守るとともに、愛情豊かに、応答的に関わる」と書かれていることから、保育者の子どもに対する愛情豊かで応答的な関わりであると考えられる。

このように1歳以上3歳未満児における保育内容を考えていくと、保育内容5領域とあるが子どもと保育者の人間関係を基礎においてそれが成り立っていく様子が伺える¹⁷⁾。このことから1歳以上3歳未満児における重要な事柄は保育士と子どもの安定した関係であることが改めて分かる。

次に本論文は2歳児の保育者との関係を中心とした人間関係の広がりについて考察するため保育所保育指針における1歳以上3歳未満児の保育内容「人間関係」を概観する。

③保育所保育指針（平成29年3月告示）における1歳以上3歳未満児の保育内容「人間関係」

1歳以上3歳未満児の保育内容「人間関係」では、子どもと保育者の安定した関係の重要性がまず書かれている。その関係を築いていくためにも子どもたちは保育者の応答的な関わりの中自らの欲求を出し、それが適切に満たされることの重要性があり、その上で、子どもは他の子どもたちに自ら働きかけていこうとすることが書かれている。

このことは「子ども・子育て支援制度なるほど BOOK」の中で、少人数できめ細かな保育を行うこと¹⁸⁾がうたわれている。小規模保育においても子どもと保育士の中に流れる温かい関係性をベースに置き友達の関係が広がっていく様子が想像出来る。ただ、友達とのかかわり方に関しては自分の思いが前面に出てしまうこともあるので保育者が子どもたちの間を取り持つことの必要性が伺える。

このように保育所保育指針（平成 29 年 3 月告示）の 1 歳以上 3 歳未満児の保育内容と保育内容「人間関係」を改めて確認した。自分自身で出来る事が増えてくる中で自分の思いもたくさん出てくる時期だからこそ、保育士との関係を基に、友だちと思いを共有したりぶつかったりする。この中で、自分の気持ちを整理したり、他の人に自分の思いを伝える術を体得していくことが分かる。

④ 2 歳児の友達及び仲間関係に関する先行研究の概略

保育所等保育現場における 2 歳児の友達及び仲間関係に関する先行研究は、「模倣」をテーマにしたもの^{19) 20)21)}、1 人の子どもの遊びと生活を通してクラスメートとかかわる実態と、それらに対する保育者援助の実態を明らかにしたもの²²⁾、保育者や友達などに対する「見て」という発言の考察²³⁾等がある。しかし、まだまだ数として少ない。また、これらの先行研究では 1 クラスの年度当初である 4 月から子どもたちの友達関係を観察したものはない。

しかし、子どもの友達関係は年度途中で突然始まるわけではなく子どもは、4 月や在園時からの保育士との安定した関係を基に、日々の保育の積み重ねの中で出来上がっていくものである。そこで、実際に小規模保育 A 型の 2 歳児クラスにおいて 4 月当初からエピソード記録を取る中で子どもたちが友達関係を築いていく姿と保育者の援助や配慮について考察する。

II. 方法

場 所：近畿府県下にある小規模保育所（A 型）2 歳児クラス

期間と時間：2017 年 4 月から同年 7 月までの月 2～4 回。時間は 9:30～12:30 頃。

倫理的配慮

調査は小規模保育代表者と主任保育士の許可を得て行った。在籍している子どもの保護者に研究目的、方法、個人情報保護、本人意思の尊重、研究協力の有無による利益、不利益はないことなどを文章で説明し、研究協力の同意を得た。

対象児：小規模保育に普段通っている 2 歳児 6 名（男児 3 名、女児 3 名）であった。それぞれの入所時期は次の

Table 1 の通りである。

Table 1 対象児について

仮名	性別	入所時期
あい	女児	1 歳児から
だい	男児	1 歳児から
まさ	男児	1 歳児から
みく	女児	2 歳児 4 月
ゆめ	女児	2 歳児 6 月

林：2歳児が友達と一緒に活動する楽しさを味わうために

観察方法

筆者が参与観察者として保育に参加する中で保育者が子ども同士の間関係に対して行った援助が見られた場面を基に、その時の子どもの様子（言葉、体の動き、表情など）を観察した。また、観察者がビデオを回すと子どもの普段の姿が見ることが出来ないことを想定し、筆記記録をし、それをエピソード記録にまとめた。

尚、子どもたちや保育者の日常の姿を観察する為に、参与観察をすることにした。ここでは、子どもや保育士が出来るだけ普段の姿を出すことが出来るように次のような配慮をした。

筆者自身がビデオではなく筆記記録を行う為に普段の保育の流れを把握する為に、2017年2月下旬から保育に入った。

分析視点

エピソードの中に見られる、こどもをつなぐ保育者の援助を基に考察をした。

Ⅲ. 結果と考察

エピソード① お友達と一緒に嬉しい（4月）

2歳児クラスの子ども（あい、みく）が午前中の自由遊びの後、排泄を済ませおやつを食べるためテーブルに着いた。絵本を見ながらアンパンマンのキャラクターの話になり、あい、みくと保育者の間に次のようなやり取りがあった。

みく 「カレーパンマン（好き）」

保育者「カレーパンマンって珍しいよね。カレーが好きなの？」

みく 「カレー好き。カレーパンマン！」

あい 「カレーパンマン好き」

保育者「え？あいちゃん、バイキンマンが好きじゃなかったっけ？カレー好きだから？」

あい 「カレーパンマン好き」

みく 「ドキンちゃん好き」

あい 「あいもドキンちゃん好き」

保育者「あいちゃん、みくちゃんと一緒に良いんだね。みくちゃんが入って来てくれてうれしいんだよね」

あいとみくが笑顔でうなずいた。

翌週、排泄後子どもたちは2歳児の部屋に入室しおやつを食べるため椅子に座った。最初、まさの横にあいが座り、その後しばらくしてみくが帰ってきた。みくは、あいとだいの間に座ろうとしたが椅子がなかった。保育者に椅子がある場所に座るように言われ、残っていたまさの前の席に座った。

おやつを食べ、製作をしようと保育者が教材を取りに行った。すると、だいが保育士の事が

気になって保育者の後についてその様子を見に行った。それを見て、みくの隣の席が空いたことが分かったあいは、だいが座っていた椅子、つまりみくの隣に移動した。その後、帰ってきた保育者が笑顔で「あいちゃん、みくちゃんの横が良かったの？」と聞いた。あいはその保育者の言葉を聞いてうなずいた。

あいが1歳児の時、1歳児クラスはあいを除き全員男児であり、あいが同じ部屋の子どもの発言に同調する姿は見られなかったように思う。

しかし、ここでみくの発言を聞き、あいは本当はバイキンマンが好きだったにもかかわらず、あいがみくと一緒にキャラクターが好きと言った。この姿をから、あいにとって本当に「みく」と一緒にうれしいというあいの思いが見られた。同時に、あいのこのような姿からみくが園に入所してくれてうれしいという思いが伝わった。

また、あいの思いを保育者が言葉で表すことによってあいとみく二人の気持ちをつないでいるように伺えた。

このようなあいの「みくと一緒にうれしい」という気持ちは翌週のエピソードでも見られている。この翌週のエピソードでは、あいだけでなくみくもあいと一緒に良いという思いが伝わってくる。この子と一緒に座りたいという思いがみくからあいに伝わって、あいもみくの隣の席に移動したのだろう。

このように何気ない「あいちゃん、みくちゃんと一緒に良いんだね。みくちゃんが入って来てくれてうれしいんだよね」という保育者のちょっとした一言が子どもたちの人間関係を繋いでいくように思われた。

エピソード② みーんなお休み（5月）

今日は、ゴールデンウィーク中日ということで、2歳児クラスもあい一人を除き全員お休みだった。朝の自由活動時も他の2歳児が休みだったことが理由なのか、集中しておらず、なんとなくおもちゃをもってフラフラしているようであった。

暫くすると、保育者のところに洗濯ばさみを持って行き「(洋服に)つけて」という。保育者が洗濯ばさみの1つをもち「何色の洗濯ばさみにする？」と聞いた。するとあいは「ピンク。ピンク好き」と言ったので、ピンクの洗濯ばさみを洋服に付けた。すると、自分の思いを聞いてもらえたのが嬉しかったのか「これ、ここに付けて」と思いを次々と伝え始めた。

排泄後におやつを食べ散歩に行くことになった。もともとあいは4月から「2歳児」だから頑張らなくては」と言う思いをもっていた。そして、今日のあいはいつも以上に「2歳児」であることを意識していた。靴を履くことも歩くことも片付けをすることもいつも以上に頑張っ取り組もうとする姿が見られた。そのせいか普段よりも、頑張りすぎていて会話が少なくなっているように感じた。

公園に着き、突然あいが「ママはシゴト。ママはシゴト。ママはシゴト。だいちゃんは…」と言いまるで、「お母さんは仕事だから、我慢しなくちゃ」と自分に言い聞かせているような様子であった。そして、名前が出たのは一人であったがいつも同じクラスにいる子どもが誰もいないのに、自分はここにいて寂しいという思いがあいから伝わってきた。

そこで、保育者はあいと十分に関わる必要性をととても感じ滑り台で踏切ごっこをした。保育者が「カンカンカン」とあい滑り台を滑る時にと踏切の真似をして手を上下にした。あいは目を輝かせ、滑り台を滑った。あいはこの遊びがとても楽しかったようだった。だからあいは「もう一回。カンカンカンしたい」と何度か言ったり、「アンパンマン（を描いて）」と言ったりし、保育者に甘える姿を見せた。そして、普段のあいの姿が見られるようになった。

公園から園への帰り道は、1歳児の男児、保育者、あいの3人で手をつないでいた。その中で、あいはお母さんと公園に行って滑り台を滑ろうとしたけど、濡れていて滑れなかったことなどを饒舌に話した。

園までもう少しのところ、1歳児の男児が歩くことに疲れてしまって座り込んでしまった。するとあいさつと、男児の手を取り、握りしめ目を見て「だいじょうぶ？」と言った。すると、男児はあいの言葉に励まされたのか立ち上がり、再び歩いて園まで歩いて行った。

ゴールデンウィークの中日ということもあり、2歳児クラスは4人中3人が休みであった²⁴。このような中、みくだけではなく同じクラスの子どもたちにも目が向いているからあいは「みんなお休みでない。自分のクラスは自分だけ…」という思いを抱えていた。だから「だいちゃんは…」と言う言葉が出てきたと思われる。

そして、「クラスみんなは休みで多分ママと一緒に過ごしているのに、自分のママは仕事だから一緒にママと過ごせない。だけど自分は2歳児クラスだから頑張らなくてはいけない」という思いから、「ママはシゴト、ママはシゴト」とあいは自分自身に対し言い聞かせて頑張っていたことが予想される。

その様なあいの気持ちを理解し、あいの思いを汲みとったから保育者はあいと1対1で丁寧に関わったと思われる。このような保育者のかかわりがあったからこそ、あいは、保育者と一緒に楽しい活動をすることで気持ちを切り替えたと考えられた。そして、年下の子ども困っている姿にも寄り添えるほど余裕が出てきたので、「だいじょうぶ？」という言葉が出てきたと考察された。

同じクラスの子どもに対し「友達」という思いを持っているからこそ、いつも以上に子どもの数が減る時は特に子どもの気持ちに寄り添う援助や配慮が大切であると感じられた。

エピソード③ボクガ！（5月）

給食前に保育者が「今日のお当番さんは…」と言うと、「あい」、「だい」、「まさ」、「みく」と

当番をしたくて自分の名前を言う子どもたち。「今日のお当番さんはまさ君です」という言葉の後、「〇〇ちゃんはどこでしょう？」の手遊びに合わせて、まさは自分の名前をみんなの前でちょっと緊張しながらも言い、給食を食べる机を拭いた。その後、もう一つ別の食器を置く机に向かった。

その間、保育者は給食を取りに行った。まさがテーブルを拭いていると、だいがまさの横に来て、ぴたっとくっついた。最初からまさはだいの行為が机を拭くのに邪魔だったので「イヤ」と言っていた。それでもだいはまさにはびったりとくっついた。

その後もまさは「イヤ」とだいに言ったり、手で払いのけるようなしぐさをしていた。しかし、それでもだいはびったりとまさは何度もくっついた。まさはだんだんと机を拭くことを邪魔するだいに腹が立ち、だいの胸を手で押した。すると、だいはしりもちをついてしまった。しりもちをついただいは急に起こったことに驚いてすぐにはびっくりして声も出なかった。しかし、暫くするとすぐに大きな声で泣き出した。

そこに保育者が帰ってきて、「痛かったの？」とだいに聞いた。だいは「痛かった」という思いを受け止められて少し気持ちの整理がついたようだった。だからだいは次に胸を指しここが痛かったと泣きながら訴え、そして、「まさ」と言った。「まさ君がしたの？」と保育者が聞くと、だいが頷いた。そこで、保育者は次にまさには話を聞いた。

まさは、だいを押したら泣いてしまったので、困ってしまったようであった。だから、自分自身の平静を保つために、無言で机を拭き続けていた。しかし、保育者の「だい君はまさ君がしたって言ってるよ」と言う保育者の言葉を聞き、保育者の方を見た。そして、保育者はだいに「まさ君がどうしたの？」と聞くと、だいはまさ自分が自分を押したことを伝えた。

保育者はまさには嫌だった気持ちは分かるけど押すのはダメな事であると伝えた。そして、だいは当番をしたかった気持ちは分かるけど当番でないときは椅子に座って待つ決まりになっている事を伝えた。

この様子を見ていた、あいやみくは「あいもしたかった」、「みくもしたかった」と言った。

園の中で一番の「お兄ちゃんやお姉ちゃん」だから「お手伝いをしたいし、お手伝いもできる」という思いを持っている2歳児。だから、2歳児クラスの全員⁵³が「当番に取り組みたい」と保育士に自分の名前を言ってアピールする姿があった。しかし、そのクラスでは当番活動を順番にすることが決まっていた。このため子どもたちは自分の順番でない時は当番活動を、我慢する必要があった。

これまで、まさとだいが関わっている姿はあまり見られなかった。例えば、散歩に行く時にだいは1歳児クラスの男児と手を繋いで歩きたくて保育者に訴える姿があった。まさはその時その時で手を繋ぐ子どもが変わっていた。庭で遊ぶ時も一緒に遊ぶというよりも自分たちが取り組みたい活動をそれぞれがすることが多く二人がそれほど関わっているように思えなかった。

林：2歳児が友達と一緒に活動する楽しさを味わうために

このようなまさとだいであったので、だいがまさに対してぴったりとくっついていった行動に少しばかり驚いた。この時のだいの表情はとても笑顔でニコニコとしておりまさに対して当番をすることに対しての嫌がらせや嫉妬という思いはあまり感じられなかった。保育者が給食を取りに行き部屋にいなかったため、だいがまさに対してふざけていたのではないかと思われた。だから、まさも最初はそれほど怒っていないような表情で「イヤ」と言っていたのだと考えられた。

だいはまさが本当に嫌がっているように思えなかった。この為、何度もだいがまさにくっついていった、このような事をだいがまさにも繰り返す中でまさも段々と腹が立ってきて、ついにはだいを強く押したのではないかと思った。

そこに保育者が給食を持って保育室に帰ってきた。保育士はその場の状況を見て、だいとまさの間に起こった事がなんとなく分かった。だから、保育者は「まさくんダメでしょう」というような一方的にまさ一人だけを怒ることはしなかった。そして、だいに「痛かったの？」と声をかけた。だいの気持ちを受け止めた上で、だいの「まさ」という声を拾い、「まさくんがしたの？」と聞いた。そのだいの思いを「だい君はまさ君がしたって言うてるよ」と代弁し、子ども同士のトラブルに向き合っていた。

このように子どもにとって保育者は思いを受け止められて話を聞いてもらえる存在であった。このため、あいもみくも「(当番を)したかった」と自分の思いを保育者に言ったと考えられる。

子どもを繋ぐ関わりをしていくからこそ、同じクラスの友達が気になりトラブルが起こる。そのような時でも、基本的な事は子どもの思いを受け止めることである。子どもを信じ、子どもが自分で相手に思いを伝えることができるように子どもの言葉で子ども同士を繋いでいく事が重要であると思われた。

エピソード④分かっているのだけど… (6月)

あいの登園時、保育者が「みくちゃんが待っていたよ」と声を掛けていた。一方みくもあいが登園してきたことを知ると「やったー」と喜びの声を上げていた。この1ヶ月、観察者が園に行った日はみくがお休みだった。だからこの日は、久しぶりにあいとみくが揃った日であった。

今日は少し曇り気味であったので、散歩には行かず園庭で遊んだ。虫を探す子ども、汽車の遊具で遊ぶ子ども、芝生の感触を楽しむ子ども、子ども一人一人それぞれに遊びを楽しむ姿があった。

あいは遊具で汽車を運転する真似をし、お客さんになって遊んでいた。汽車の遊具である遊びが楽しくなってきたころ、あいは0歳児に突然、腕をつかまれた。0歳児はつかまり立ちをする為にあいにつかまったのだ。しかし、あいは0歳児が急に腕を引っ張ったと思った。楽しく取り組んでいた遊びを邪魔されたあいは腹が立ってその子どもを押した。するとその0歳は

泣いた。一瞬にしてあいは「しまった」と思い顔をひきつらせた。

0歳児のクラスの保育者が0歳児に悪気はなかったこと、つかまり立ちをする為につかまってしまったことをあいに伝えた。あいも保育者の思いや状況は分かった様子ではあった。でも、楽しんでしていた自分の遊びが突然中断してしまったあいは、気持ちの整理がつかず中々遊びに戻れなかった。

しばらくあいは遊具から園庭を眺めていた。そんなあいの目に、みくが多くの子どもたちと一緒に保育者との追いかっこを楽しむ姿が映った。あいもなんとなく楽しくなり、「みくちゃーん。みくちゃーん」と2回大きな声でみくを呼んだ。

別の保育者が「あいちゃんも入ってたら？」と声を掛けたが、みくの名前を呼ぶことが楽しかったのか返事はなく再度「みくちゃーん」と大きな声で叫んだ。その後、あいは「(みくちゃんとお友達)とお友達」とつぶやいた。そして笑顔で追いかっこをするあいの姿があった。

あいが園に登園した時の保育者の「みくちゃんが待っていたよ」とみくの「やったー」という言葉からあいとみくの関係が良好であることが伺える。

しかし、良好であると言ってもいつも一緒に遊ぶわけではなかった。お互いに自分のしたい活動をする中で一緒に関わる姿が多く見られた。この日もあいは遊具でみくは虫を探したり裸足で走ったりとそれぞれの遊びを楽しんでいた。

このように互いが夢中で遊んでいる中で、あいと0歳児の間にトラブルが起こった。0歳児が泣いた瞬間、あいは「(保育士に)怒られる」、「失敗してしまった」と言う思いもあり顔が引きつったと考えられる。あいからすると楽しく遊んでいたところ、急に0歳児に腕を引っ張られた。自分の気持ちを受け止め話を聞いてもらう前に0歳児担当の保育者に0歳児の行為の理由を聞いた為、その保育者に注意をされたと感じたのかもしれない。この為、あいは気持ちの整理がつかず再度遊びだすことが難しかったのではないかと思われた。

そんな時、みくが同じ2歳児クラスのまさ、だい、1歳児、保育者と楽しそうに声を上げ追いかっこをしている姿があいの目に入った。あいはみくちゃんに「自分はここにいるよ」と気付いてほしくて、「みくちゃーん」と大きな声で言った。しかし、みくは遊びに夢中になっており、あいの声に全く気付いていない様子だった。「どうして気付いてくれないのかな？」とあいの中であれこれ思いを巡らせていたから保育者の「あいちゃんも入ってきたら？」と言う声掛けに反応できなかったのだろう。みくが自分に気付いてくれなかった理由として「声が小さかったから」とあいは考え、再度「みくちゃーん」と大きな声で叫んだのだと思われる。

しかし、遊びに集中し声を上げて遊んでいたみくはそれに全く気付かず笑顔で追いかっこに没頭していた。そのみくの姿に「みくが夢中になるような遊びってきっと楽しいのだろう」と言う思いから段々と一緒にしてみたくなった。だから「お友達」という言葉であいは自分の気持ちを切り替えることができ、追いかっこを一緒にするようになったのではないかと思わ

れた。

エピソード⑤ 私の友達…（7月）

給食後、2歳児の部屋で遊び始めた子ども達。みく、だい、たかは絵本をそれぞれ読み、あいとゆめはそれぞれままごとで遊んでいた。

暫くすると、あいがお机の上に2枚の青い小さなお皿を置いた。どうするのだろうと思って見ているとそのうちの1枚にいちごののったショートケーキとぶどうを置いた。

観察者はあいがいちごなどの果物が苦手だったことを思い出して、「あいちゃん、いちごとかぶどうって好きだったっけ？」と聞いた。すると、あい「酸っぱいから嫌だ」と言った。どうしていちごのケーキとぶどうなのかな？と疑問に思っているとあい「みくちゃん」とケーキとブドウがのったお皿の置いてあるテーブルにみくを誘った。

みくは読んでいた絵本を直し、テーブルに来てお皿に乗っているぶどうといちごがのったケーキを食べ始めた。それを見てケーキにはお茶がいると思ったのかあいは小さな湯呑をみくに渡し自分はポットでみくにお茶を注いだ。

その様子を見ていたゆめは持っていた鍋の中に星の形をしたホットケーキをもってみくの所に来た。みくは自分の為にゆめがそれ持ってきてくれたことが分かったのでその鍋の中に入っていたホットケーキを食べた。

すると、あい「それは食べないで」と言い、自分もみくの横に座って「あいちゃんのコップ」と言ってコップを持ちお茶を飲もうとした。しかしすぐに、ポットがないことに気付く、ままごとコーナーにポットを取りに行った。するとあいが取りに行っている間に、あいのみくの横で一緒にお茶を飲むために使おうと思っていたコップをゆめがとってしまった。保育者は、子どもが自分の言葉で友達に自分の思いを表現して欲しいと思い、少し離れた場所からこの様子を見守った。

そこにあいポットを持って帰って来た。しかし、みくの横においていた自分が使おうと思っていたコップはなかった。ふと、横を見ると自分が使おうと思っていたコップをゆめが持っていた。そしてこともあろうに、それを使ってみくにお茶を出そうとしていた。

それを見たあいはゆめに「あいの（コップ）！返して！」と言ったが、ゆめはみくにそのコップを出してしまった。保育者は、あいとゆめの間に入りこの問題を整理し、解決を図ろうと近づいていこうとした。しかし、みくが自分の気持ちを次のように表現したのもう少し様子を見守ることにした。

みくはゆめの渡したコップをゆめに無言でいらないと返した。そして、あいに自分が使っていたコップをひっくり返してお茶を抜く真似をし、しっかりとお茶を抜いた後、自分が使っていたコップをあいに差し出した。しかし、あいはそれを投げてしまった。そして、みくは悲しそうな顔になった。

この一連の様子を根気よく見守っていた保育者は、あいのコップを投げた行為に対して注意をした。

4月当初より保育者はあいとみくの2人を繋ぐ言葉がけをしていた。この為2人の間では「友達」という思いが芽生えていると思われるし、実際2人の仲もよく一緒に活動する姿も見られていた。

だから、あいには果物が苦手なのにお皿の上にみくが好きな果物を乗せてみくを遊びに誘っている姿からも分かるように、みくと一緒に遊ぶ時はみくと2人だけとする活動を望んでいたと推察される。

みくはあいだけではなく、自分の取り組みたい活動を通して友達と一緒に過ごすことが好きな子どもであった。みくがあいの誘いにのりあいの用意した果物を食べたのは、「(あい)に誘われたから」だけではなく「その遊びに興味を持ったから」ということだったと考えられた。この時点において少しあいと女みくの間には「みくと遊びたいあい」と「あいには誘われたし遊びに興味を持ったみく」という点からお互いの思いに少しずれがあったのではないかと考察された。

一方ゆめは6月入園の子どもで、あいと一緒に関わりたいという気持ちもあるし、興味のある活動も今回のままごとのように似ている部分があると思われる。そして、保育者もあいとゆめをつなげるような言葉掛けもしていた。だから、ゆめからすると平衡遊びだったとはいえ最初にままごとをしていたのはあいとゆめであった。そして、ゆめはあいとみくのやり取りが面白そうだったこともあり2人の活動を自分もしてみたくくなって、みくに鍋に入った星型のホットケーキを持っていった。みくはお客さんになっていたので、ゆめが持ってきたホットケーキをあいの用意したケーキや果物と同じように食べた。

その一連の行為を見たあいには「私の友達のみくちゃんがゆめちゃんに取られてしまうのではないか」というおもいが頭をよぎったのだろう。併せて「私だけがみくちゃんと遊んでいるのだからゆめちゃんは違うでしょ」という気持ちもあったのだろう。そのような思いがみくに対する「それは食べないで」と言う発言や、自分もみくの横に座りみくを独占するためにもみくと一緒にお茶を飲もうとした行為につながった。

ところがこのようなあいの複雑な気持ちは、ゆめには当然伝わっていなかった。ゆめはあいと同じようにみくにお茶を出したくてあいが使おうと思った。だからコップを使ってあいと同じようにみくにお茶を出したのだろう。

この一連の流れに対し、みくはあいが使っていたコップをゆめが取ってしまいかなに対しコップを「返して」と言ったにもかかわらず「返してもらえなかった」ことやあいの泣きそうになっていた表情から、ゆめに対して「勝手にとったらダメでしょう?」、「これはあいちゃんが使っていたものだよ」という思いもあり、かなの出したコップを「いらない」と言い返したと

林：2歳児が友達と一緒に活動する楽しさを味わうために

考えられた。

さらに、みくにとってもあいは好きな友達であり、あいがお茶を飲みたいと思っていると考えた。そして自分の持っているコップのお茶を抜きそれを差し出した。しかし、あいはみくに差し出されたコップを投げてしまったので悲しくなってしまった。

この様子を保育者は丁寧にその状況や子どもの思いのゆれに目を配りながら、子どもたちでどのように解決していくかと根気よく見守っていた。保育者はみくが自分のコップをあいに差し出した姿を見て一瞬解決したのではないかと思ったのではないだろうか。しかし、あいの「みくと一緒に！」という気持ちは非常に強く解決には至らず、みくの差し出したコップを投げた。

コップを投げる行為は危険な行為である。だから保育者はまずあいがコップを投げた行為に対して注意をしたのだらうと思う。

このエピソードではゆめがあいの使っていたコップをとった時点で「ごめんねといってね」とゆめに謝らせる解決方法はとられなかった。その理由として、みくが「ゆめの渡したコップをゆめに無言でいらないと返した」という行為をすぐにしたからであると思われる。

保育者はみくの行動を無視したりそれに気づかないことはなかった。だから、保育士者はこのみくの行いを見てその後の展開を辛抱強く見守ったと思われる。

勿論、あいがした物を投げるなどの行為はいけないことであるのでそれは注意する必要がある。しかし、子どもが自分で解決しようという思いを持つときは子どもの様子を注意深く見ていく事が必要であると思われる。そして、それは今後子どもが自分たちでトラブルの解決をしていく時のきっかけになると考えられた。

IV. 総合的考察

小規模保育2歳児において保育者がどのように子どもたちの関係をつなぎ「友達」と一緒に活動する楽しさを味わうことができるのかという事について具体的なエピソードから考えてきた。

エピソード①では友達に目が向き始め、友達と一緒にがうれしいというあいの様子が描かれている。この時期は子どもによって何かの遊びに夢中になったり、他の子どもに興味を持ったりと様々な姿がある。そのような中であいは特定の子どもが気になる姿が見られた。友達に目が向いている子どもの発言に耳を傾け、「あいちゃん、みくちゃんと一緒に良いんだね。みくちゃんが入って来てくれてうれしいんだよね。」と子どもの気持ちを保育者が言語化して、子どもを繋ぐ様子が見られた。

このように子ども同士の名前を保育者がさりげなくつないで言った結果、小規模である為子どもたちはクラスの子ども全員に目が向いていった。だから、エピソード②にあるようにあいは、連休中日にクラスの友達が来ていないことに目が向き「ママはシゴト。ママはシゴト。ママはシゴト。だいちゃんは…」という言葉が発したのだと思われる。ここで保育者があいの思

いに寄り添い丁寧に一緒に遊ぶことで、あい自身の気持ちを立て直していった。このことからこの時期の子どもにとって保育士がよりどころになっていることが分かった。

エピソード③では、まさとだいのトラブルについて記載している。別の視点から見ると2歳児クラスの全員が最初「当番をしたい」とアピールしている所や最後にあいとみくが「自分たちも当番をしたかった」とつぶやいている姿がある。このことからこのクラスの子どもたちが普段からこの保育士からその発言を認められて話を聞いてもらえると思っている様子が分かり、保育者と子どもの関係が良好であることが伺えた。

エピソード④では、4月から保育士が子ども同士を繋ぎ、あい自身にとってみくが存在が大きなものであった。そして、その存在があいの気持ちの切り替える原動力になっている様子があった。子どもにとって「友達」という言葉が「好きな人」、「一緒にいたい人」、だけでなく「(存在が)励ましになる人」という意味を持つことが考えられた。

エピソード⑤では、あい「みくだけと遊びたい」、ゆめは「(楽しそうだから)自分も(その活動を)してみたい」、みくは「好きな遊びをしたい。あいと仲が良いし、あいに誘われたからあいとごっこ遊びを一緒にしよう。でも、ゆめも一緒にするのなら構わない」という三者三様の思いがあったことがトラブルの始まりだったように思われる。このように友達関係が少しずつ出来てきたのでお互いの気持ちや思いのずれが起こり、それが原因でこのトラブルは起こったと考えられた。

その中で、保育士は根気よく子どもの気持ちや思いに目を向け見守った。見守る中でみくがあいの気持ちを思って自分が使っていたコップを貸すという行為が出てきた。しかしそのみくの好意に対し、あい自身の感情を爆発させてコップをなげ落としてしまった。だから、このトラブルは単純なあいとゆめの物の取り合いで終わらなかった。

保育士として危険な行為は注意する必要がある。しかしそれ以前の段階では、保育士が子どもの様子を注意深く見守ったからこそ、子どもが自分で考えて問題を解決しようとする姿がでてきた。このように、子どもの安全に配慮することが前提ではあるが、保育士として子どもを信頼し根気よく見ていくことは、子どもが物事の解決方法を考えるきっかけになることが考えられた。

このように2歳児で友達に目が向いてきて、「自分の友達」という思いを持っている子どもや遊びに入りたいのだけど上手く入りきれない子どもに対し、その行為やその裏にある一人一人の子どもの思い、気持ち、感情を整理し伝えていく事は保育士が子ども同士を繋ぐ援助としてこれからも必要になってくると思われた。そして、それが子どもの友達関係を繋ぎ、子どもたち自身がお互いの思いを押し量れるような人間関係の構築に必要であると推測された。

このようにエピソード①～⑤から、「2歳児が友達と一緒に活動する姿」と保育士の援助や配慮について見てきた。ここから、以下の4点が分かった。

第一に、子どもが自分たちの気持ちを表現できるように保育士がその思いを受け止めている

林：2歳児が友達と一緒に活動する楽しさを味わうために

こと。

第二に、2歳児の子どもが友達と一緒に活動する為に近くで活動している子どもがお互いの子どもに気付けるようにさりげなく声を掛けていること。

第三に、子ども自身が友達に目が向き友達の存在がその子ども自身の励みになる場合、温かく見守ることが必要であること。

第四に、友達に対する思いが芽生えてきたからこそ起こるトラブルに対し、子どもの安全に配慮しながら丁寧にお互いの気持ちを繋いでいく必要があること。

今回、具体的事例を通し「2歳児が友達と一緒に活動する楽しさを味わうためにー「子どもをつなぐ」保育者の援助や配慮を中心にー」というタイトルで考察を加えてきた。保育者が丁寧に子どもたちの友だちの存在を繋いで行ったからこそ「自分の友達」という思いが生まれてきたことが伺えた。

V. 今後の課題

「保育者が単に子どもの存在をつなぐだけではなく、温かい目で子どもたちを見守る中で、子どもの気持ちも整理しながらつないでいくこと」により、「自分だけの友達」という「自分とあの子」という2人での関係から「自分と複数の友達」という「自分とあの子とあの子」という子ども自身の友達関係の広がりがいかにして生まれていくかについて検討したい。

謝辞：この論文の作成に当たってご協力いただきました小規模保育の園長先生、先生方、子どもたちに感謝いたします。

<注>

- 1) 保育所保育指針の改定に関する中間とりまとめの概要 2016 社会保障審議会児童部会保育専門委員会
http://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12601000-Seisakutoukatsukan-Sanjikanshitsu_Shakaihoshoutantou/gaiyo.pdf 2017/05/08 アクセス
- 2) 厚生労働省 2015 「保育所等関連状況取りまとめ（平成27年4月1日）」p.3
<http://www.mhlw.go.jp/file/04-Houdouhappyou-11907000-Koyoukintoujidoukateikyoku-Hoikuka/0000098603.pdf> 2017/05/08 アクセス
- 3) 厚生労働省 2015 「保育所等関連状況取りまとめ（平成27年4月1日）」p.2
<http://www.mhlw.go.jp/file/04-Houdouhappyou-11907000-Koyoukintoujidoukateikyoku-Hoikuka/0000098603.pdf> 2017/05/08 アクセス
- 4) 厚生労働省 2016 地域型保育事業の件数について（平成28年4月1日現在）
<http://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000-Koyoukintoujidoukateikyoku/tiiki.ninkakensu.20160401.pdf> (2017/02/21 アクセス)

- 5) 小規模保育所は3つの型（A型、B型、C型）があり、それぞれ認可基準が表のように異なる。

小規模保育所

		A型	B型	C型
保育士の数	0歳児	3:1	3:1	3:1
	1・2歳児	6:1	6:1	
	その他	※配置基準+1名		(補助者を置く場合 5:2)
資格		保育士 (当該事業実施区域に係る国家戦略特別区域限定保育士を含む)	保育士 (当該事業実施区域に係る国家戦略特別区域限定保育士を含む) 1/2以上と保育従事者(市町村長が行う研修を修了した者)	家庭的保育者 (市町村長が行う研修を修了した保育士又は保育士と同等以上の知識及び経験を有すると市町村長が認める者)
		保健師、看護師又は准看護師を、一人に限り、保育士とみなす		

厚生労働省 2016 家庭的保育事業等の設備及び運営に関する基準（平成二八年二月一九日厚生労働省令第二三号）より筆者が作成

<http://law.e-gov.go.jp/htmldata/H26/H26F19001000061.html> (2017/02/21 アクセス)

尚、当該事業実施区域に係る国家戦略特別区域限定保育士とは、国家戦略特別区域法（平成二十五年十二月十三日法律第七号）「第十二条の四、五の5」に記されているように、認定区域計画に定められた事業実施区域を管轄する都道府県の知事が行う国家戦略特別区域限定保育士試験に合格した者で、当該事業実施区域において、国家戦略特別区域限定保育士となる資格を有するものの事である。

- 6) 小規模保育はその性質上3歳未満児を対象とした施設である為、小規模保育における2歳児の3歳児以降の保育の場が見つからない事柄。
- 7) 総務省 2016 子育て支援に関する行政評価・監視—子どもの預かり施設を中心として—結果に基づく勧告> p.3 http://www.soumu.go.jp/main_content/000452626.pdf 2017/05/08 アクセス
- 8) 国は、小規模保育施設でも3歳以上の受け入れができるよう国家戦略特区を設けることで、「3歳の壁」に対応する方針を定めている。
- 9) 厚生労働省 2017 保育所保育指針 p.9~10
<http://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000-Koyoukintoujidoukateikyoku/0000160000.pdf> 2017/05/09 アクセス
- 10) 厚生労働省 2017 保育所保育指針 p.17,24,33,34
<http://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000-Koyoukintoujidoukateikyoku/0000160000.pdf> 2017/05/09 アクセス
- 11) 毎日新聞 2017 保育園に入りたい「3歳の壁が厚すぎる」の声
<https://mainichi.jp/articles/20170308/k00/00m/040/121000c> 2017/5/21 アクセス
- 12) 総務省行政評価局 2016 子育て支援に関する行政評価・監視—子どもの預かり施設を中心として—結果報告書 http://www.soumu.go.jp/main_content/000452634.pdf p123,124 2017/5/22 アクセス
- 13) 社会保障審議会児童部会保育専門委員会 2016 保育所保育指針の改定に関する中間とりまとめ p.13 http://www8.cao.go.jp/shoushi/kodomoen/k_4/pdf/s2.pdf 2017/2/23 アクセス

-
- 14) 厚生労働省 2017 保育所保育指針 p.24
<http://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000-Koyoukintoujidoukateikyoku/0000160000.pdf>
f_2017/05/09 アクセス
- 15) 例えば、「生命の保持」においては「子どもの生活の安定を図ること」、「情緒の安定」においては「自分でしようとする気持ちを尊重し、温かく見守るとともに、愛情豊かに、応答的に関わること」が密接に結びついている。
- 16) 文部科学省 2008 幼稚園教育要領解説書 p.58
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/youkaisetsu.pdf (2017/03/09 アクセス)
- 17) このような「保育内容人間関係」を保育の基礎に考える考え方は以前からある。例えば「保育者の子どもへの関わりとして人間関係を考えれば、保育内容のすべてが人間関係だと言える」や、「従来の保育内容「人間関係」のテキストを何種類か読んでみるとそこには保育に関するすべての事が書いてある」などが述べられている。
- 鯨岡峻 2010 保育・主体として育てる営み ミネルヴァ書房 31,257
- 18) 内閣府 文部科学省 厚生労働省 2016 子ども・子育て支援新制度 なるほど BOOK 改訂版
http://www8.cao.go.jp/shoushi/shinseido/event/publicity/pdf/naruhodo_book_2804/w_print.pdf
2017/5/11 アクセス
- 19) 竹下千春 菅眞佐子 2014 保育園 2歳児クラスに見られる模倣の特徴：仲間関係の発達との関連に注目して 滋賀大学教育学部紀要, 教育科学 (63), pp.97~110
- 20) 大桑萌 2014 0~2歳児の仲間関係における模倣の役割 保育学研究 52(2), pp.172~182
- 21) 齋藤多江子 2012 1~2歳児の仲間と物とのかかわり 保育学研究 50(2), pp.96~107
- 22) 丸山良平 2008 保育園女児ミホの他児とのかかわりと保育者援助の実態 上越教育大学研究紀要 27, pp.33~42
- 23) 中島寿子 2006 子どもの提示的呼びかけについての一考察(3): 保育所1・2歳児クラスの二人の子どもの事例をもとに 西南女学院大学紀要 10
<http://ci.nii.ac.jp/els/contents110004866400.pdf?id=ART0008051083>
- 24) これは2017年5月の出来事であり、まだかなとはるは在籍していない為、2歳児クラスは全員であり、まさ、だい、みくの4名である。